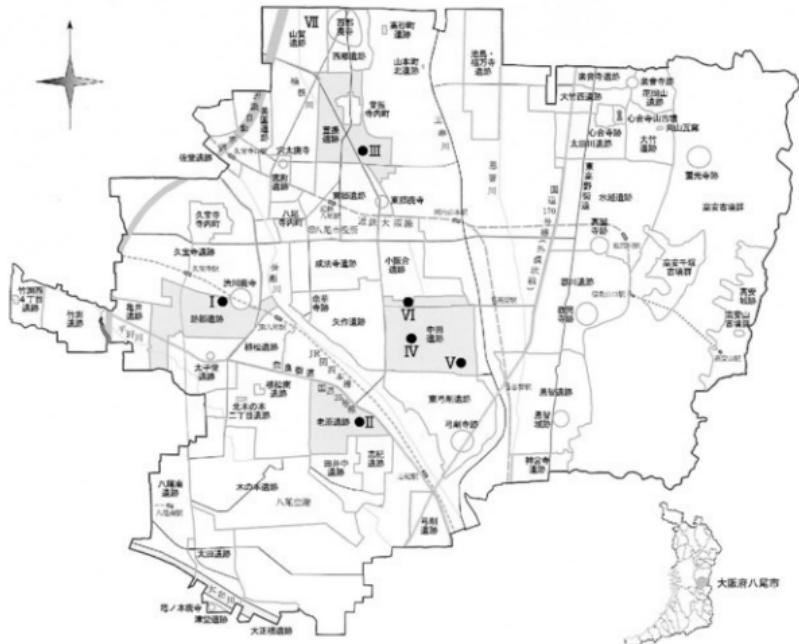


- I 跡部遺跡（第42次調査）
- II 老原遺跡（第14次調査）
- III 萱振遺跡（第29次調査）
- IV 中田遺跡（第52次調査）
- V 中田遺跡（第53次調査）
- VI 中田遺跡（第54次調査）

2014年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

- I 跡部遺跡(第42次調査)  
 II 老原遺跡(第14次調査)  
 III 萱振遺跡(第29次調査)  
 IV 中田遺跡(第52次調査)  
 V 中田遺跡(第53次調査)  
 VI 中田遺跡(第54次調査)



2014年





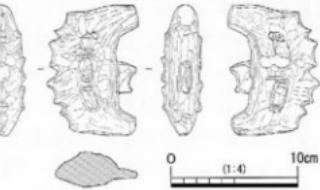




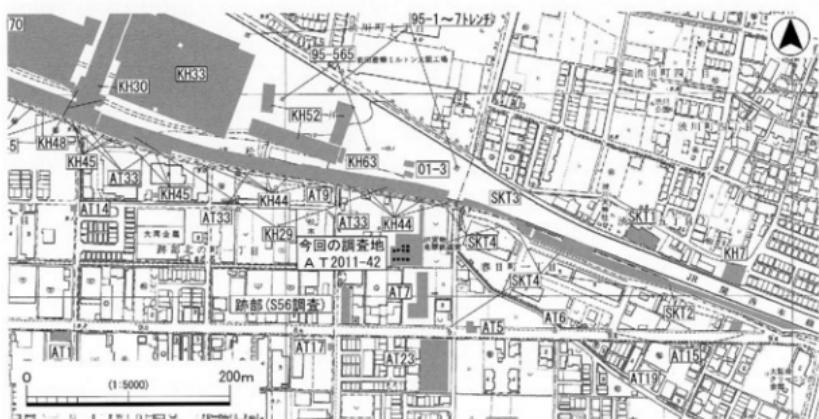
# I 跡部遺跡第42次調査（A T2011-42）

## 1. はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に所在する弥生時代前期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、北龜井町3丁目の一部、跡部本町1～4丁目、跡部北の町1～3丁目、跡部南の町1・2丁目、太子堂1・2丁目、春日町1～4丁目、東太子1丁目、安中町3丁目の一部、植松町4丁目の一部にわたる東西約1.4km、南北0.5～1.0kmがその範囲とされている。地理的には、河内平野南部の北寄りに位置し、旧大和川の主流であった長瀬川左岸の沖積地上に位置する。当遺跡の北側には久宝寺遺跡・渋川廃寺、東側に植松遺跡、南側に太子堂遺跡、西側に龜井遺跡が隣接する。当遺跡は、昭和53年に春日町一丁目で行われた旧国鉄職員寮建設の際、弥生土器や鎌倉時代の瓦が出土したことにより、その存在が確認された。以後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会によって多次にわたる発掘調査が実施されている。今回の調査地は遺跡範囲中央の北端あたり、北側の久宝寺遺跡に隣接している他、東側には中河内最古の古代寺院である渋川廃寺が近接する。周辺で実施した発掘調査としては、北側道路部分で久宝寺遺跡(KH)第29次調査、跡部遺跡(AT)第33次、南側で跡部第1・5・7・23次調査、東側で渋川廃寺(SKT)第1・2次調査等がある。主な調査成果としては久宝寺(KH29)の弥生時代後期の大量の土器集積、奈良時代前半の丸太分割削抜き井戸、跡部(AT33)の古墳時代中期の溝から出土した滑石製子持ち勾玉、渋川廃寺(SKT2)の塔基壇等が挙げられる。また南側の調査地では、跡部(AT23)で弥生時代後期～古墳時代前期の集落構造が検出されている他、跡部(AT5)では弥生時代後期末以前に埋納された銅鏡が出土している。



子持ち勾玉(跡部遺跡第33次調査)



第1図 調査位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、平成24年1月19日に実施した造構確認調査〈跡部遺跡(2011-339)〉の結果を受けて実施した共同住宅建設に伴う調査で、当研究会が跡部遺跡内で行った第42次調査(A.T.2011-42)である。

調査区は建物基礎部分の10箇所(北西から1~10区)で、各調査区平面形は約2.5m四方の正方形を呈し、総面積は約62.5m<sup>2</sup>を測る。

調査は南西部から実施した。調査にあたっては、現地表(約T.P.+8.8~8.9m)下約0.7mまでを機械掘削し、以下を人力掘削により調査を行った。

調査で使用した標高の基準は、調査地北東部に位置する八尾市街区三角点(2014A:T.P.+9.747m)である。

### 2) 基本層序

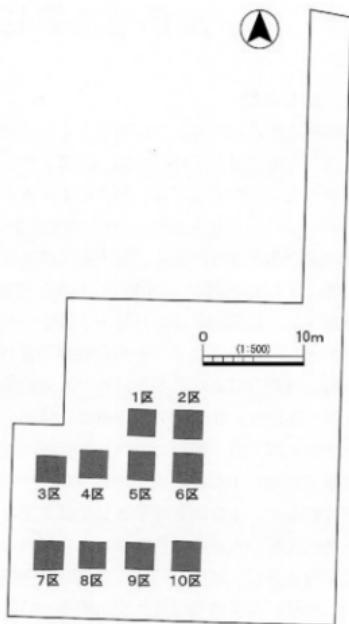
1層は現耕作土で、2層はこれに伴う近年の整地層(床土)である。3層は旧耕土。4層は10区を除く全域で見られた。攪拌された作土で時期は近世であろう。5~12層は全域に広がる攪拌された作土である。時期は中世~近世であろう。13層は3区、14~15層は10区で見られた水成層である。16層は3~6区で見られた土壤化層である。作土の可能性もある。17層は1・3・4・7区で見られた土壤化層で、18層をベースとして北西に向ってやや下がる堆積状況である。1・3区では古墳時代中期の遺物包含層となっており土器集積が見られた。18層は全域で見られた土壤化層である。19~21層は湿地性の水成層である。

### 3) 検出造構と出土遺物

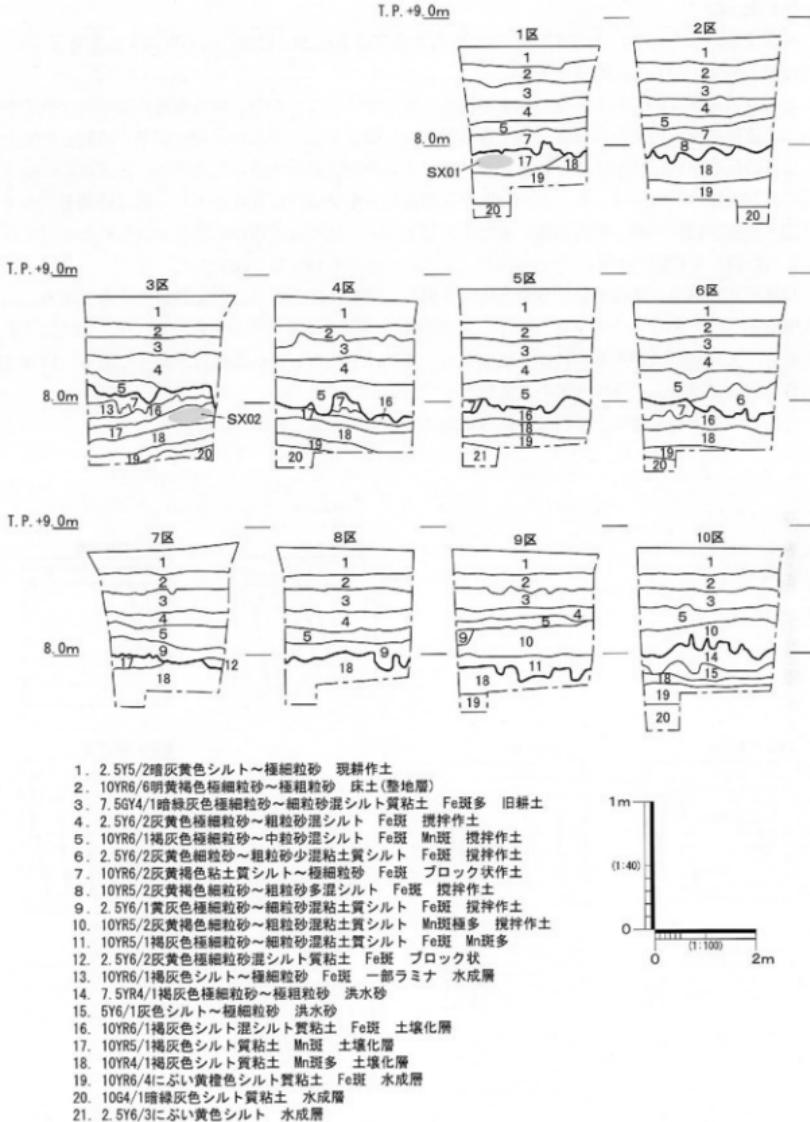
地区毎に異なるが、作土である5~12層の層中~下面において溝26条(S.D.01~26)、ピット2個(S.P.01・02)を検出した。造構面の標高はT.P.+7.9~8.1mを測る。また17層中のT.P.+7.9m前後で土器集積2箇所(S.X.01・02)を検出した。なお17層は1・3・4・7区で見られたが、4・7区からは遺物は出土していない。

#### S.D.01~26

調査地全域に広がる溝群である。概ね北東~南西方向に平行して直線的に延びるが、8区ではやや方向の異なるS.D.17・18が見られ、10区ではS.D.25が屈曲してS.D.26に接続する状況が見られる。規模は幅25~50cm程度のものが多く、最大で1.4m以上(S.D.08)を測る。断面形状は逆台形~皿状を成し、深さは10~25cm程度を測る。



第2図 調査区位置図



第3図 北壁断面図

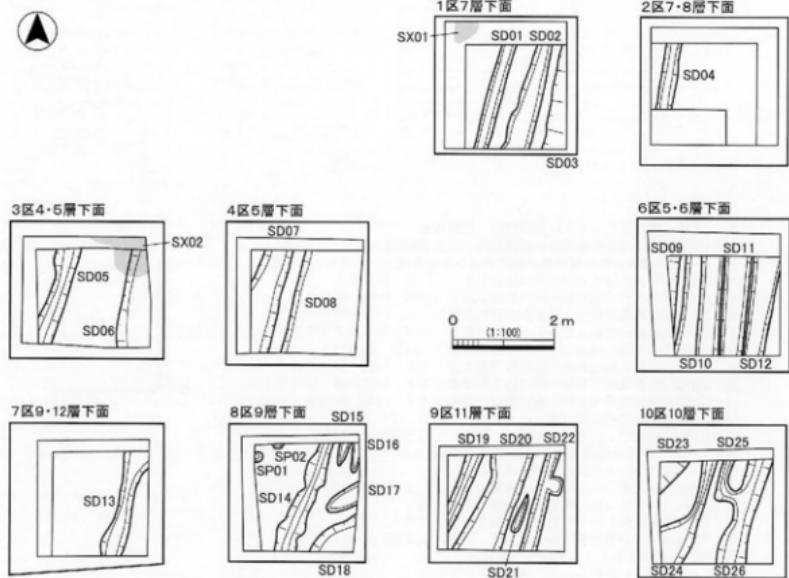
## SP01・02

8区で検出した。共に全容は不明であるが、平面形は直径20cm程度の円形を呈すると考えられ、断面逆台形で、深さ5cm程度を測る。

これらの遺構はいずれも上位の作土が埋土となっていることから、耕作関連の遺構群と捉えられる。遺構面からの遺物は5区を除く各地区から少量出土しているが、細片が多く時期を特定し得るものは少ない。列挙すると、3・6・9区からの12世紀後半頃の瓦器腕片、8区の中世頃の瓦器甕細片、3・4・6・7～10区からの古代～中世頃の屋瓦片があり、他は時期不明の土師器・須恵器細片が多くを占める。また1・2・3・6区では下層から巻き上げられたと捉えられる古墳時代中期頃の土器片が見られた。これらの中から17～19を図化した。

17は平瓦である。焼成不良でやや土師質を呈し、調整は凹面布目、凸面縄目タタキである。二次焼成を受けているよう全体に煤けており、特に凹面には厚く煤が付着する。18は須恵器杯蓋である。天井部に灰が被る。19は平瓦である。調整は凹面布目、凸面縄目タタキである。17は4区SD08、18は6区、19は9区の遺構面出土である。

これらの遺物から勘案して当遺構面の時期は中世頃と考えられよう。



第4図 平面図

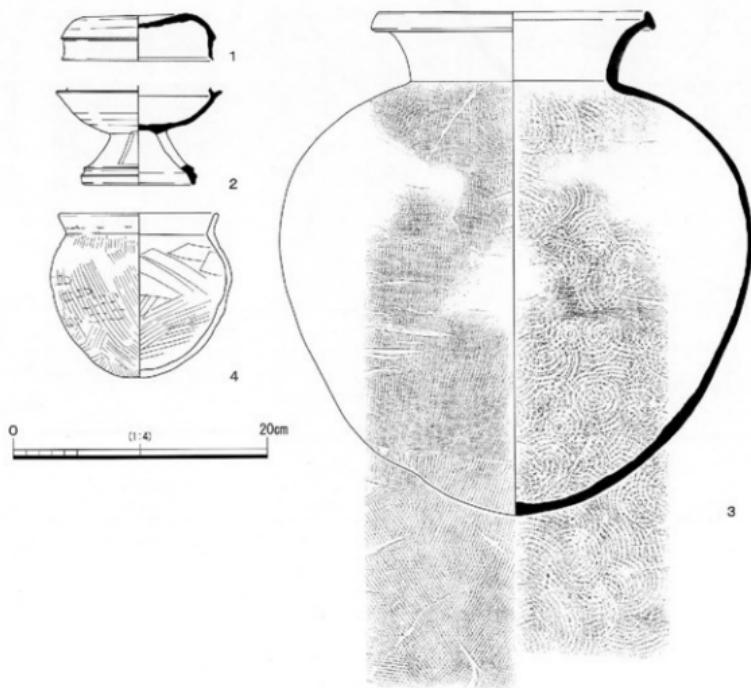
## S X01

1区北西角の17層中で検出した。検出部分は約50cm四方の範囲で、北は調査区外に続く。土師器壺・須恵器杯蓋・高杯・壺等が出土しており、1～4を図化した。

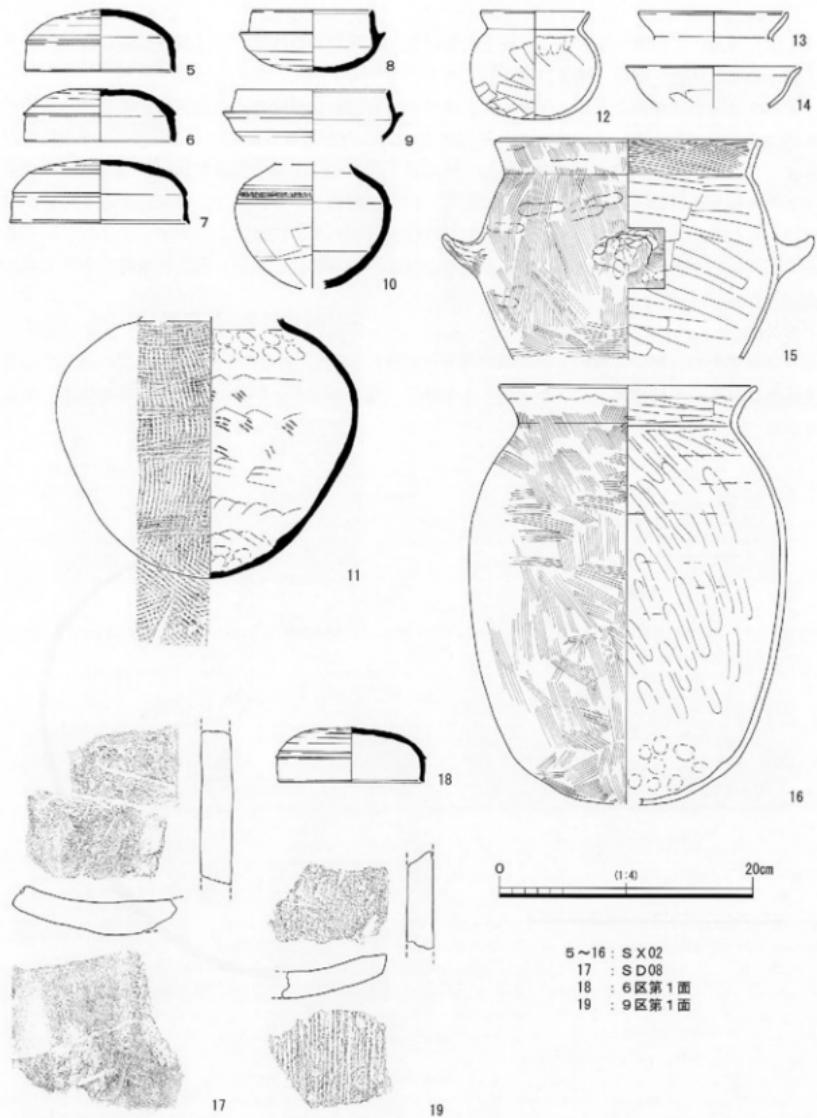
1～3は須恵器である。1は杯蓋で、天井部が窪むほか口縁部の一部に歪みが生じている。天井部に自然釉が掛かる。2は高杯で、脚部の3方向に台形スカシを穿つ。3は壺で、1/2程度が遺存しており、口径22.2cm・器高39.5cm・体部最大径37.2cmを測る。調整は底体部外面縦位の平行タタキ後カキ目、内面同心円タタキである。口頭部回転ナデで、外面には先行する平行タタキが認められる。4は土師器壺である。調整は底体部外面ハケ、内面は上半ナデ、下半板ナデである。これらの土器の時期については、須恵器がTK23～TK47型式に比定され、古墳時代中期末頃に比定される。

## S X02

3区北東角の17層中で検出した。検出部分は東西約1.0m、南北約0.8mの範囲で、北・東は調査区外に続く。土師器壺・鍋・小形壺・小形鉢等、須恵器杯身・杯蓋・高杯・壺等が出土しており、5～16を図化した。



第5図 S X01出土遺物



第6図 出土遺物





調査地(北東から)



1区機械掘削(西から)



1区(北から)



1区北壁



1区S X 01(東から)



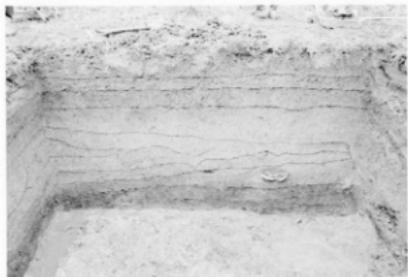
2区(北から)



2区西壁



3区(南から)



3区北壁



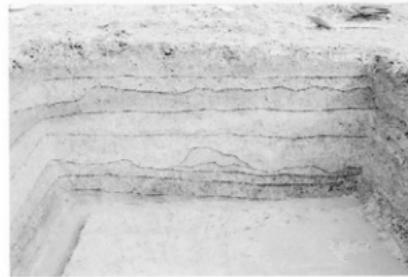
3区S X02(南から)



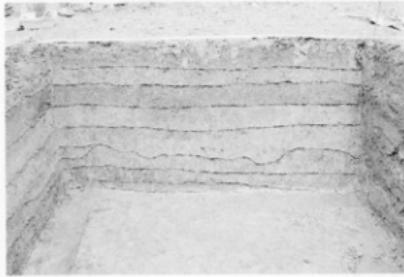
4区調査状況(南西から)



4区(南から)



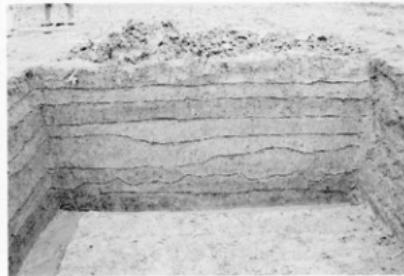
4区北壁



5区北壁



6区(南から)



6区北壁



7区(南から)



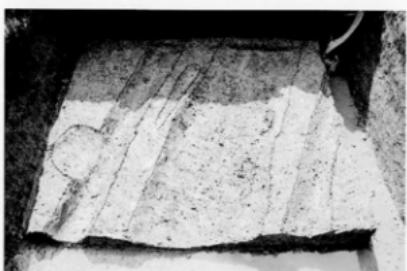
7区北壁



8区(南から)



8区北壁



9区(南から)



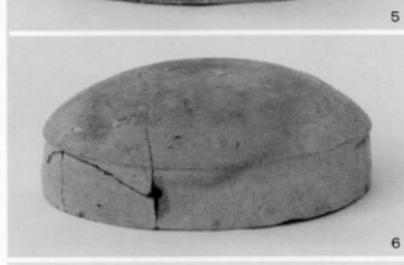
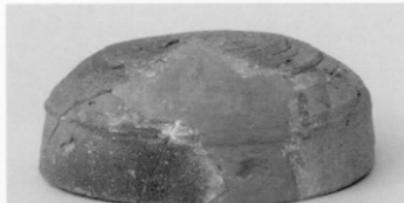
9区北壁

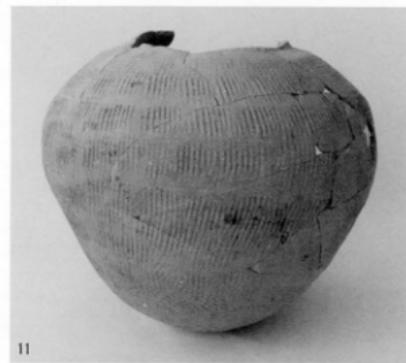


10区(南から)

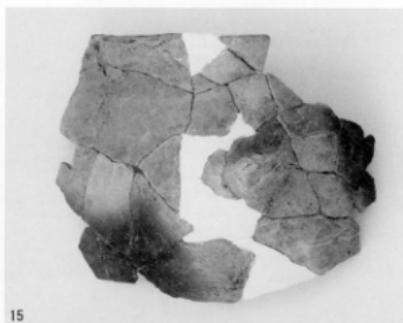


10区北壁





11



15



18



16



19





## II 老原遺跡第14次調査（O H2012-14）

### 1. はじめに

老原遺跡は八尾市南西部にあたり、現在の行政区画では老原1～4丁目、東老原1・2丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に位置している。当遺跡周辺には南に志紀遺跡・田井中遺跡が隣接し、長瀬川を挟んで北東部には矢作遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡が存在する。また当遺跡北側は長瀬川左岸に平行する奈良街道に面している。街道沿いにあたる老原1丁目地内の田中には、一辺約5m・高さ約1mを測る方形の高まりが現存しており、「五条宮」と称されている。この付近からは奈良時代後期の細弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから、ここを中心として奈良時代の寺院(五条宮寺)の存在が想定されている。しかしこれまでの発掘調査では当該期の遺構・遺物は確認されていない。

当遺跡における最初の発掘調査は、昭和52年に市教委により実施された(市S52)で、弥生時代相当の地層が確認された。続く(市S56)では古墳時代後期・鎌倉時代前期の遺構が検出され、さらにその後の市教委・研究会による発掘調査や遺構確認調査によって、当遺跡は弥生時代～近世の遺跡として認識されている。地域毎に概観すると、遺跡範囲北部～中心部の(OH85-2)・(OH88-4)・(OH95-6)・(OH96-7)・(OH97-8)・(95-319)では平安時代後期以降の集落域が検出されている。また南部～東部の(市S56)・(OH84-1)では古墳時代後期以降の遺構・遺物が見られるが、(OH84-1)では後期古墳の副葬品を暗示するような遺物が認められ注目される。



第1図 調査位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市東老原2丁目所在の老原変電所内で実施される電力管埋設工事に伴う調査で、当研究会が老原遺跡内で行った第14次調査(OH2012-14)である。同変電所内においては市教委による市S52調査、当研究会による第1次調査(OH84-1)の他、造構確認調査(2009-160、2010-457)を実施している。

調査区は立坑部分で、調査区平面形は東西約8.0m×南北約12.4mの長方形を呈し、総面積は約95.5m<sup>2</sup>を測る。

調査にあたっては、現地表(約T.P.+11.4~11.5m)下約1.4mまでを機械掘削し、以下を人力掘削により調査を行った。また調査区北部に東西約5m×南北約2mの下層確認トレンチを設定し、機械による掘削後、断面観察を行った。

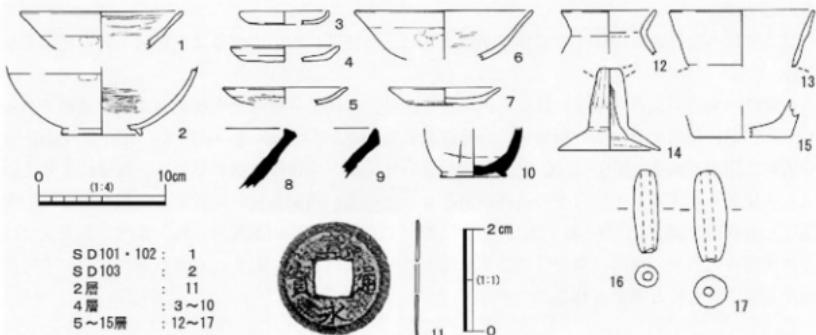
調査では、調査地北東部に位置する八尾市街区多角点〈20A17: T.P.+12.171m〉を標高の基準とした。



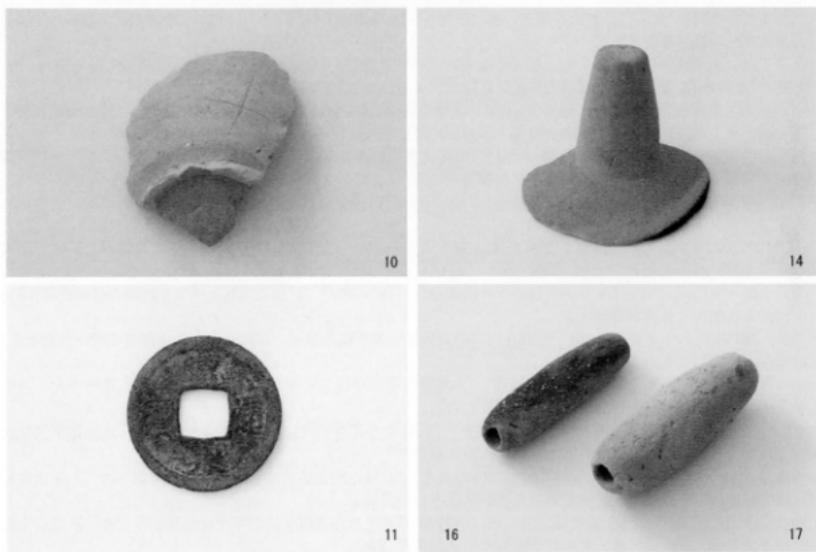
第2図 調査区設定図







第4図 出土遺物



墳時代前期後半～中期に比定されよう。15は弥生土器底部で、中期頃に比定される。16・17は土師器土錘である。法量は16が長さ6.4cm・直径約1.7cm、17が7.1cm・2.5cmを測る。





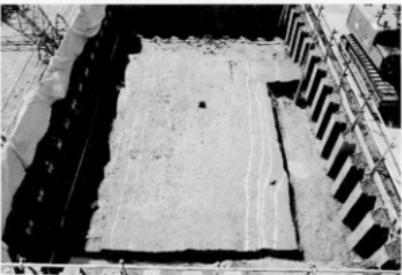
調査地(北から)



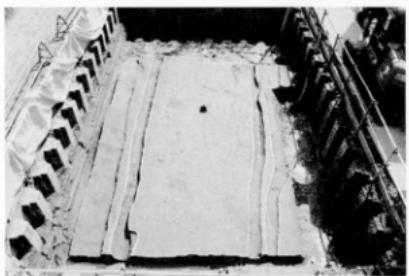
機械掘削(東から)



調査状況(北東から)



第1面検出状況(北から)



第1面(北から)



第1面(南西から)



S D 103北壁



10層上面(北から)



12・13層上面(北から)



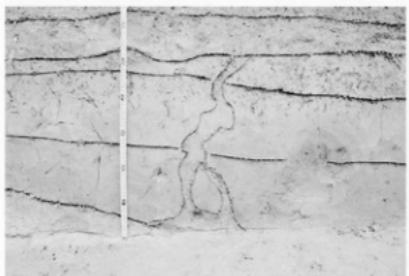
調査状況(北から)



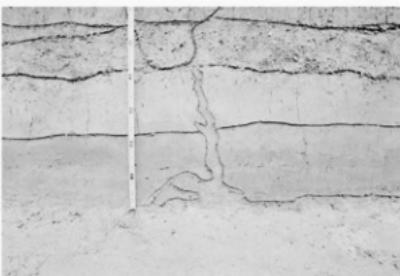
東壁



北壁



北壁噴砂



北壁噴砂



下層確認トレンチ(南東から)



下層確認トレンチ北壁





### III 萱振遺跡第29次調査 (KF2013-29)

#### 1. はじめに

萱振遺跡は、大阪府八尾市の北西部に位置し、緑ヶ丘1～5丁目、萱振町1～7丁目、北本町3・4丁目、楠根町1丁目の東西約0.5～0.9km、南北約1.1kmがその範囲とされている。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位冲積地に位置している。

当遺跡は、遺跡範囲南東部の緑ヶ丘に存在した八尾競馬場[昭和5(1925)～15(1940)]跡地内において、昭和18(1943)年に防空壕を構築する際に、古墳時代中期の土師器片や子持勾玉が出土したことにより遺跡として認識された。昭和57(1982)年以降には、府営・市営住宅の建替えや、府立八尾北高校、市立生涯学習センター等の公共施設建設に伴う大規模な発掘調査や、公共下水道工事等に伴う小規模な発掘調査が、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会により実施されてきた。これら一連の調査の結果、当遺跡は弥生時代中期～鎌倉時代に至る複合遺跡であることが明らかとなっている。

主な調査成果を概観すると、遺跡範囲北部の府立八尾北高校建設に伴う発掘調査では、弥生時代後期～室町時代の遺構・遺物が検出され、古墳時代前期後半の「萱振1号墳」からは、鱗付円筒埴輪・朝顔形埴輪の他、韌形埴輪をはじめとする豊富な形象埴輪が多量に出土しており、古墳時代前期の地域首長の動向を知る上で新たな見解を提供した。一方、遺跡範囲南部では、緑ヶ丘2丁目の府営住宅に伴う発掘調査(府教委1982・1983)で、古墳時代前期前半を中心とする居住域が検出された他、第3次調査(KF85-3)では方墳で主体部に木棺が直葬された古墳時代後期後半の「萱振2号墳」が検出されている。今回の調査地北側の市立八尾中学校内では第2・26・27次調査を、また東・南側では市営住宅建替えに伴う第4・5・8次調査を当調査研究会が実施しており、主に古墳時代前期～鎌倉時代の遺構・遺物を検出している。



第1図 調査位置図

## 2. 調査概要

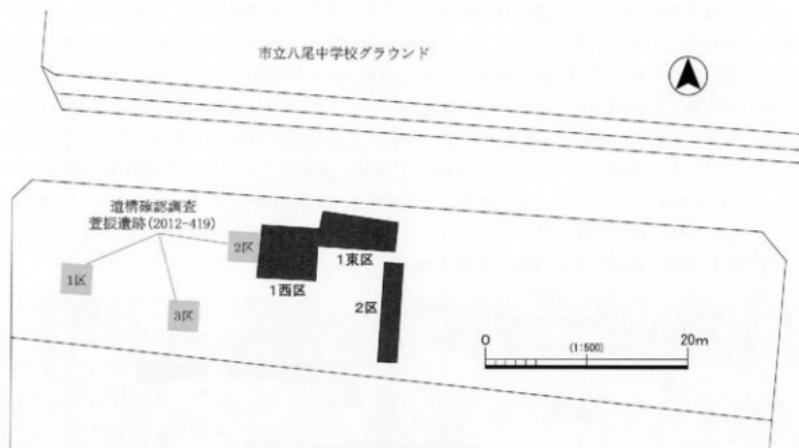
### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、平成25年4月17日に実施した遺構確認調査（萱振遺跡(2012-419)）の結果を受けて実施した保育所建設に伴う調査で、当調査研究会が萱振遺跡内で行った第29次調査(K F 2013-29)である。

調査区は2箇所(北から1・2区)で、1区は1西区・1東区に分かれる。調査区平面形は1西区が東西6.0m×南北4.5m、1東区が東西7.0m×南北3.5m、2区が東西2.0m×南北9.5mの長方形を呈し、総面積約70.5m<sup>2</sup>を測る。

掘削は、現地表(約T.P.+7.0~7.4m)下約1.0~1.2mまでを機械掘削し、以下の約0.2mを人力掘削により調査を行った。また1西区南東角、及び2区北端において下層確認調査をした。なお1西区北東部～1東区については既設構造物による搅乱がT.P.+5.5m付近まで及んでいた。

調査で使用した標高の基準は、調査地北西部に位置する八尾市街区補助点(3B128:T.P.+6.821m)である。



第2図 調査区位置図

### 2) 基本層序

0層は盛土・搅乱。1層は旧耕土。2～4層は攪拌された作土で、時期は中世～近世であろう。4層下面が第1面である。5～10層は水成層で、河川堆積である。5層や8層上部は土壤化しており、この上面が第2面である。11層は暗色を呈する土壤化層で、作土の可能性がある。遺構確認調査3区で確認した9層(T.P.+5.2m)に相当すると考えられる。12層は水成層で、河川堆積である。なお10層以下は下層確認調査において断面で確認した。





## SD 102

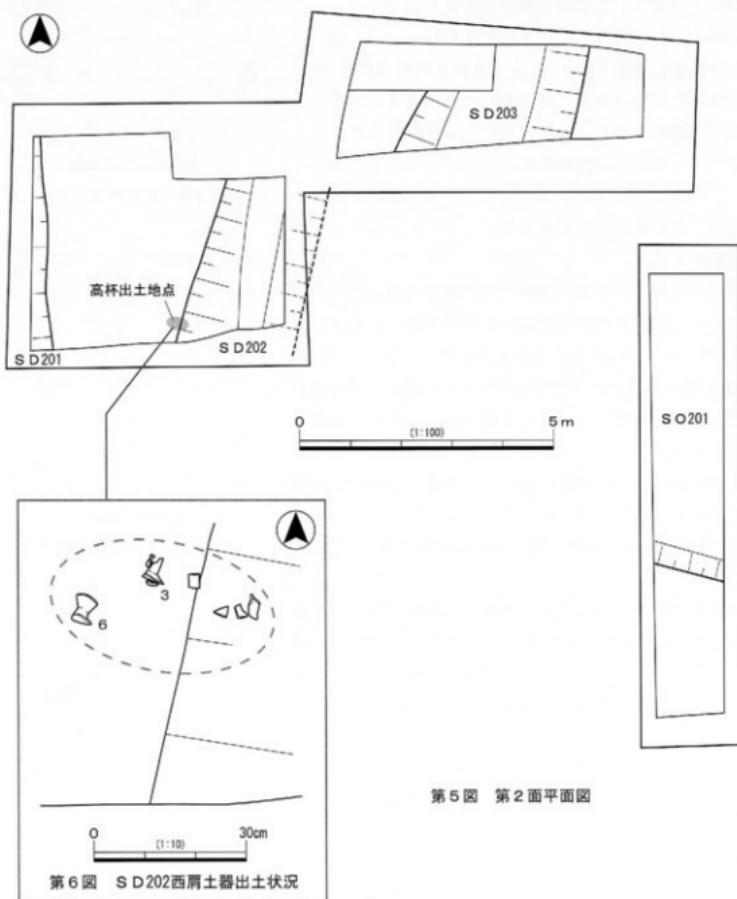
2区で検出した南北方向の溝である。幅15~30cm・深さ約5cm・検出長約3.0mを測る。断面逆台形を呈し、埋土はSK 101と同じである。

〈第2面(T.P.+6.0m)〉

5・8層上面で溝3条(SD 201~203)、落ち込み1基(SO 201)を検出した。

## SD 201

1西区西端で検出した南北方向の溝である。東肩のみの検出で、規模は深さ約25cm・検出長約4.2mを測る。遺構確認調査2区で検出した溝SD 1の東肩にあたると考えられることから、幅は1.3~2.0mを測る。断面皿状と考えられ、埋土はブロック状の2層(A1・A2層)からなる。遺物は



S D 1 と同様に古式土師器と考えられる土器片が少量出土しており、時期は古墳時代前期に比定される。

#### S D 202

1 西区東部で検出した北東 - 南西方向の溝である。北部が搅乱により削平されているため、1 東区では平面的には捉えられず南壁でのみ確認できた。規模は幅2.0m以上・深さ約40cm・検出長約3.3mを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の2層(B1・B2層)からなる。遺物は古墳時代後期～奈良時代頃の土師器・須恵器が出土した。また南部西肩際ではミニチュア品を含む土師器高杯が数点出土しており、当溝との有機的な関連が考えられる。

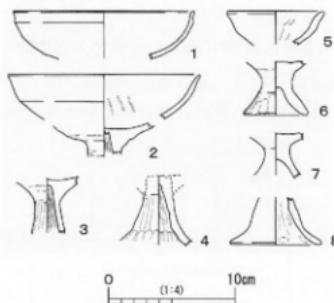
遺物は1～8を図化した。1は土師器杯である。古墳時代後期頃に比定されよう。2～4は土師器高杯で、飛鳥時代頃に比定される。2は同一個体と考えられる口縁部・底部からなり、内面に粗い放射状ヘラミガキを施す。5～8は土師器高杯で、ミニチュア製品にあたる。5は杯部で、内面が焼けている。6～8は基部～脚部で、7・8は黒斑を有する。

#### S D 203

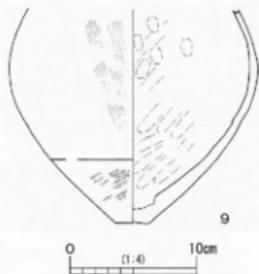
1 東区で検出した北東 - 南西方向の溝である。上部が搅乱されているため本来の構築層は不明である。断面観察ではS O 201に削平されるような状況が確認できた。規模は幅約3.0m・深さ最大30cm・検出長約2.0mを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層(D層)である。古式土師器(9)が出土しており、時期はS D 201と同様に古墳時代前期に比定される。9は壺の底体部である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面はヘラミガキと思われ、下位には平行タタキも認められる。底体部外面に黒斑を有する。

#### S O 201

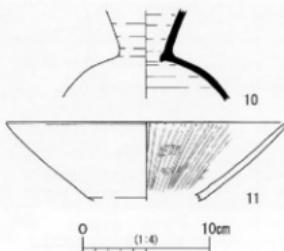
2 区中央で検出した北西 - 南東方向の直線的な肩から北に落ち込むもので、2区北半を占めるほか、断面のみの確認であるが1東区の大部分も含んでいる。規模は南北10m以上・東西8m以上で、深さは最大60cmを測る。埋土は4層(C1～C4層)を確認した。遺物は古墳時代初頭～奈良時代頃までの土師器・須恵器が出土しており、10・11を図化した。10は須恵器で、壺あるいは平瓶の可能性がある。肩部に灰が被る。飛鳥～奈良時代頃に比定される。11は古式土師器高杯である。内面調整はヨコハケ後放射状ヘラミガキである。古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される。



第7図 S D 202出土遺物



第8図 S D 203出土遺物



第9図 S O 201出土遺物





調査地(西から)



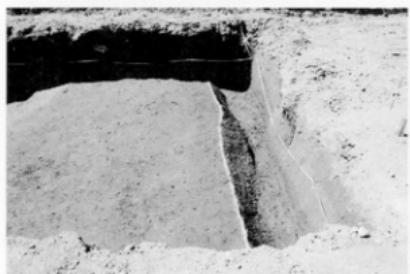
1 西区機械掘削(東から)



第1面2区全景(南から)



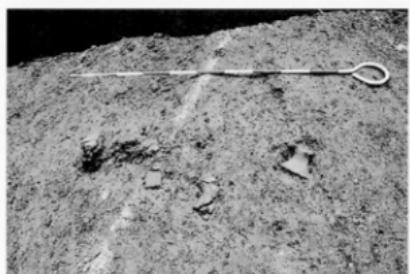
第1面2区SK101(南から)



第2面1西区SD201(北から)



第2面1西区SD202(北から)



第2面1西区SD202西肩土器出土状況(北から)



第2面1西区調査状況(東から)

図版2



第2面1東区SD 203(西から)



第2面1東区SD 203土器出土状況(西から)



第2面2区全景(北から)



1区南壁



1区南壁



2区西壁



1区下層確認トレンチ南壁



2区下層確認トレンチ北壁



2



4



6



7

8



9



10



12



15



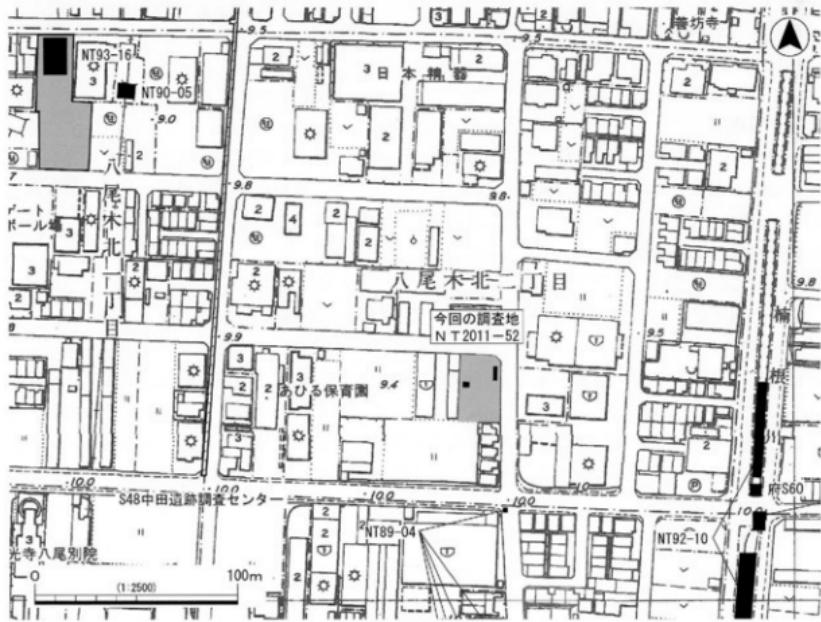


## IV 中田遺跡第52次調査 (N T2011-52)

### 1. はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。当遺跡は、昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。また同地形上に展開する東郷遺跡・小阪合遺跡等を包括して「東郷・中田遺跡群」と称されており、これらの遺跡は特に古墳時代初頭～前期において最盛期を迎えることが確認されている。

今回の調査地周辺では、北西部で第5次・第16次調査、南部で第4次調査、南東部で第6次・第10次調査を実施している。第5次・第16次・第6次・第10次調査では主に古墳時代前期の集落遺構を検出しておらず、第10次調査出土の陶質土器の可能性がある壺は特筆される。また第4次調査では弥生時代前期～中期の遺構を確認している。



## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、平成23年8月23日に実施した遺構確認調査〈中田遺跡(2011-200)〉の結果を受けて実施した寄宿舎建設に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で行った第52次調査(N.T.2011-52)である。

調査区は2箇所(西から1・2区)で、調査区平面形は1区が東西3.0m・南北3.0mの正方形、2区が東西2.0m・南北7.0mの長方形を成す。調査は1・2区を並行して実施した。

掘削は、現地表(約T.P.+10.1~10.5m)下約0.9mまでを機械掘削し、以下の約0.5mを人力掘削により調査を行った。また2区では下層確認において古墳時代前期の遺物包含層を確認したため、中間層を機械掘削した後、人力掘削により現地表下約2.0mまで調査を行った。

調査で使用した標高の基準は、調査地北東部に位置する八尾市街区多角補助点〈3E034:T.P.+10.086m〉である。

遺構名は遺構略号+地区名+面+遺構番号とした(例、S P111:1区第1面1番目のピット)。

#### 2) 1区の調査

##### ・基本層序

0層は盛土・搅乱。1層は旧耕土。2層も搅拌された作土で、時期は近世であろう。2層下面が第1面である。3層は土壤化層で、上面が第2面である。4層も土壤化層で、上面が第3面である。5層は水成層で、上部は土壤化しており、上面が第4面である。

##### ・検出遺構と出土遺物

〈第1面(T.P.+9.5m)〉

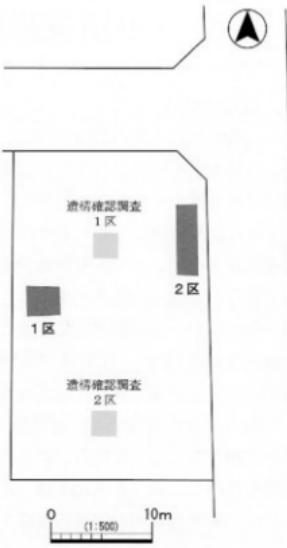
2層下面でピット2個(S P111・112)、溝1条(S D111)を検出した。

S P111・112

直径約20cmの円形を呈し、深さ約22cmを測る。S P112はS D111底部の検出で、平面形は直径約40cmの円形と考えられ、深さ約32cmを測る。共に埋土は炭を含むブロック状の單一層である。S P111からは13世紀前半頃まで、S P112からは12世紀代までの土師器・瓦器・須恵器片が出土しており、S P111出土の瓦器碗(2)を図化した。浅い器形で、ヘラミガキは内面のみに粗く施されるもので、13世紀代に比定される。

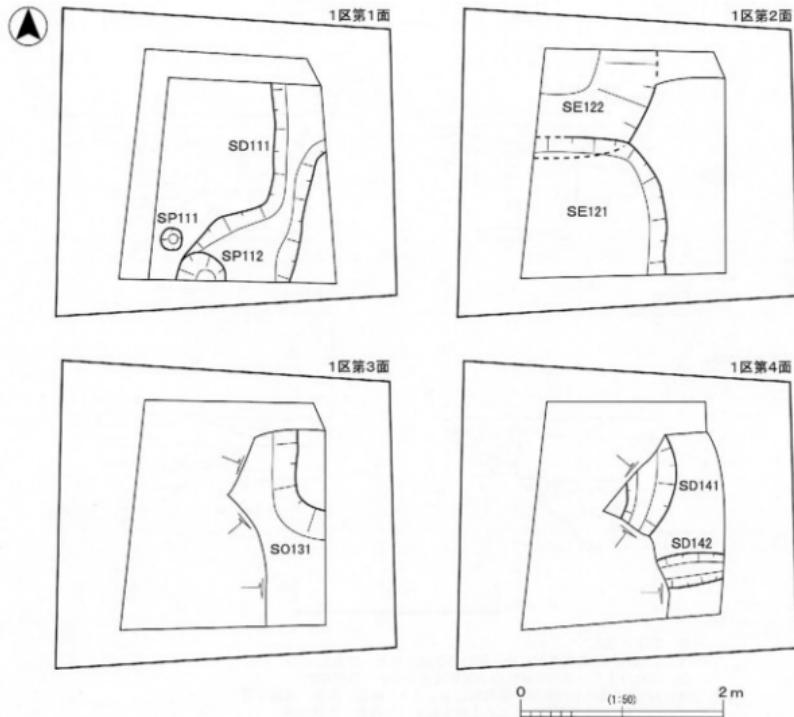
S D111

北東-南西方向に延び、平面形は幅35~95cmの不定形を成す。埋土はブロック状の單一層で、耕作関連遺構の可能性が高い。12世紀代の土師器・瓦器・須恵器片が出土しており、土師器皿(1)を図化した。口縁部のヨコナデにより、底部との境には外面に明瞭な段が生じている。



第2図 調査区位置図





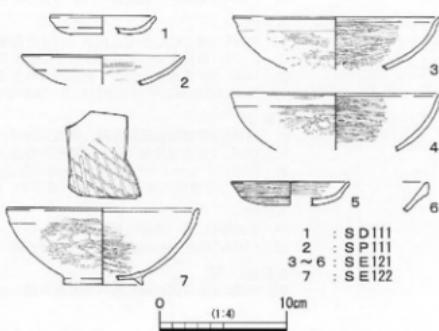
第4図 1区平面図

〈第2面(T.P.+9.4m)〉

3層上面で井戸2基(SE121・122)を検出した。

#### SE121

調査区北西部に位置しており、井戸南東部を検出した。掘方は円形を呈すると思われるが全容は不明である。規模は径約1.1m以上・深さ約1.3mで、断面逆台形を呈し、埋土は4層から成る。曲物の残片が出土しており、曲物井戸であったと考えられる。遺物は12世紀後半までの土師器・瓦器・輸入白磁が出土しており、3~6を図化した。3・4は瓦器碗である。ヘラミガキは内面が密で、外面はやや粗い。5は瓦器皿で、内外面のヘラミ



第5図 1区出土遺物

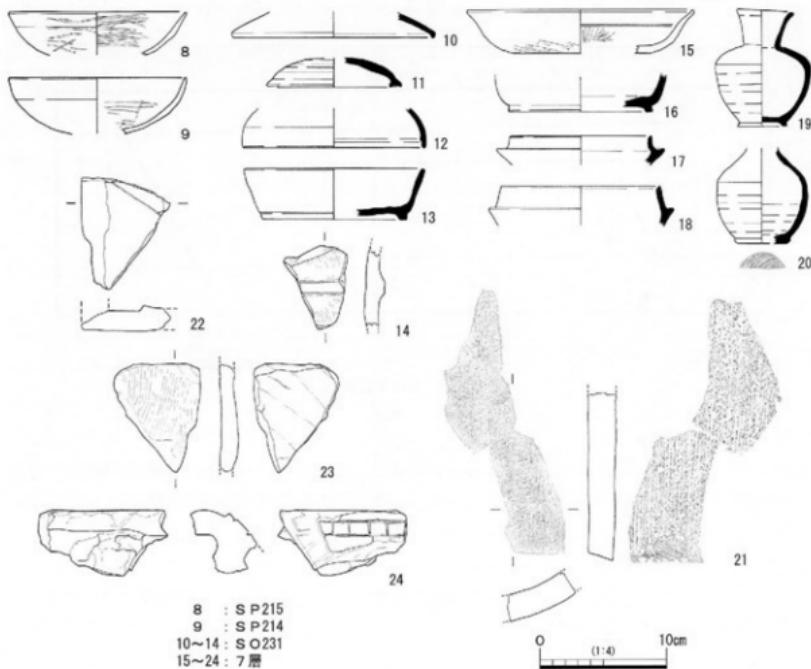




## 〈第3面(T.P.+9.2m)〉

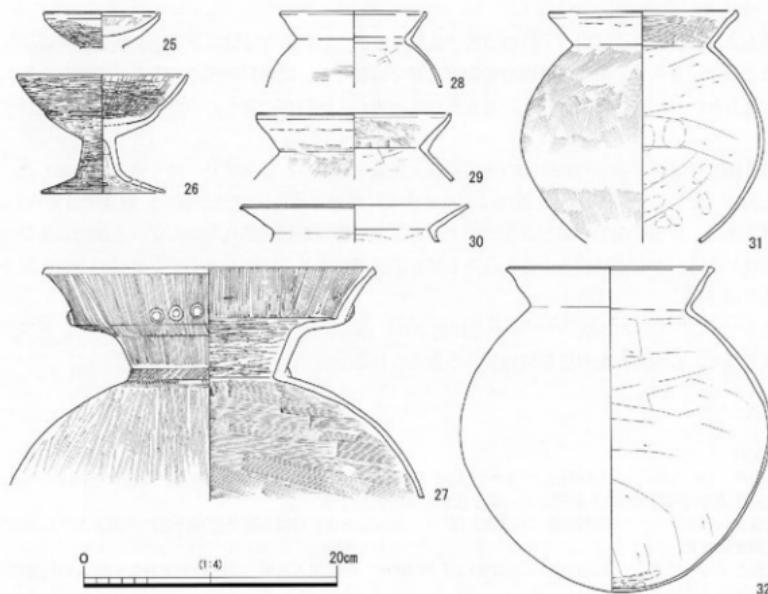
12層上面で落ち込み1基(S.O.231)を検出した。12層は調査区南部に見られ、北西-南東方向の直線的な肩から北東方向に落ち込むものである。規模は検出部分の肩の延長約1.5m・深さ最大0.6mを測り、ブロック状の8~11層が埋土に当たる。遺物は古墳時代後期~奈良時代の土師器・須恵器の他、円筒埴輪・形象埴輪が出土した。肩を形成する12・13層はブロック状を呈しており、埋土から埴輪が出土していることから勘案して、12・13層を埴丘盛土とする古墳の存在が想定でき、S.O.231は周溝にあたる可能性が高い。平面的には捉えられなかつたが、11層堆積部分が溝状を呈していることから、周溝の底部にあたる可能性があり、この場合周溝幅は約4mとなる。なお造構確認調査2区においても、北西-南東方向の直線的な肩を有する溝を検出しておき、ここからも埴輪が出土している。この溝が対面の周溝であると想定すると、一辺(直径)18m程度の方墳が復元できる。

出土遺物のうち10~14を図化した。10~12は須恵器杯蓋である。10は奈良時代、11は飛鳥時代、12は古墳時代後期に比定される。13は須恵器杯身で、奈良時代に比定される。14は円筒埴輪である。凸帯は低い台形で、外面にはタテハケが認められる。V期に位置付けられ、時期は6世紀代に比定される。



第7図 2区出土遺物①





第9図 2区出土遺物②

出する円形浮文(3個一組)を4方向に配する他、頸基部には刻み目を施した凸帯を巡らせる。口頸部内面に黒斑を有する他、26と同様、火を受けた破片が認められる。28~32は壺で、29~31が古墳時代初頭後葉(庄内式新相)、28・32が古墳時代前期前葉(布留式古相)に比定される。32はほぼ完形で、口径16.5cm、器高25.5cm、体部最大径24.5cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、底部外外面ナデ(極めて細かいハケ)、内面ヘラケズリである。外面は全体に焼ける。

#### 〈7層出土遺物〉

7層は第2面のベース層で、整地層の可能性がある。奈良時代頃までの土器等が多く出土しており、15~24を図化した。15は土師器杯である。内面には放射状のヘラミガキ、底部外面上にはヘラケズリを施す。16~18は須恵器杯身で、16は奈良時代、17は古墳時代後期後半、18は古墳時代後期初頭に比定される。19・20は須恵器壺で、19は高台を有し、20は平底で、底面には糸切り痕が認められる。19は口縁部が歪んで平面梢円形を呈するもので、口径4.0~4.5cm・器高9.2cm・体部最大径7.6cm・底径3.8cmを測る。口縁部内面・肩部外面上に灰が被る。21は平瓦で、焼成良好で須恵質に近い。凹面布目、凸面繩目タタキである。22~24は埴輪である。22は屈曲部分を有する板状の破片で、表面には段を成す。調整はナデである。家形埴輪の壁等が考えられる。23は円筒埴輪と考えられる。外面調整はタテハケで、表面には朱塗りを施しているようである。24は切妻あるいは入母屋造の家形埴輪の屋根と考えられる。頂部付近の端部にあたり、破風板の接合面が認められる他、線刻により押縁が表現されている。





調査地(北から)



1区機械掘削(南から)



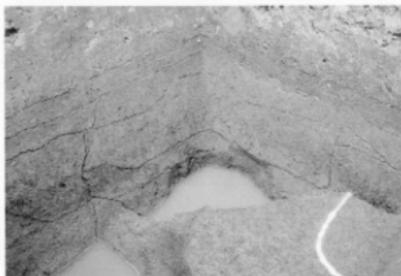
1区第1面(南から)



1区第2面(北から)



1区SE121(北東から)



1区SE122(南東から)



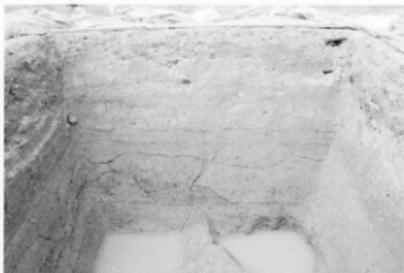
1区第3面(西から)



1区第4面(南から)



1区南壁



1区西壁



1区北壁



1区東壁



1区調査状況(北東から)



2区機械掘削(南から)

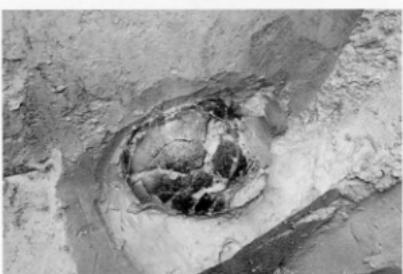


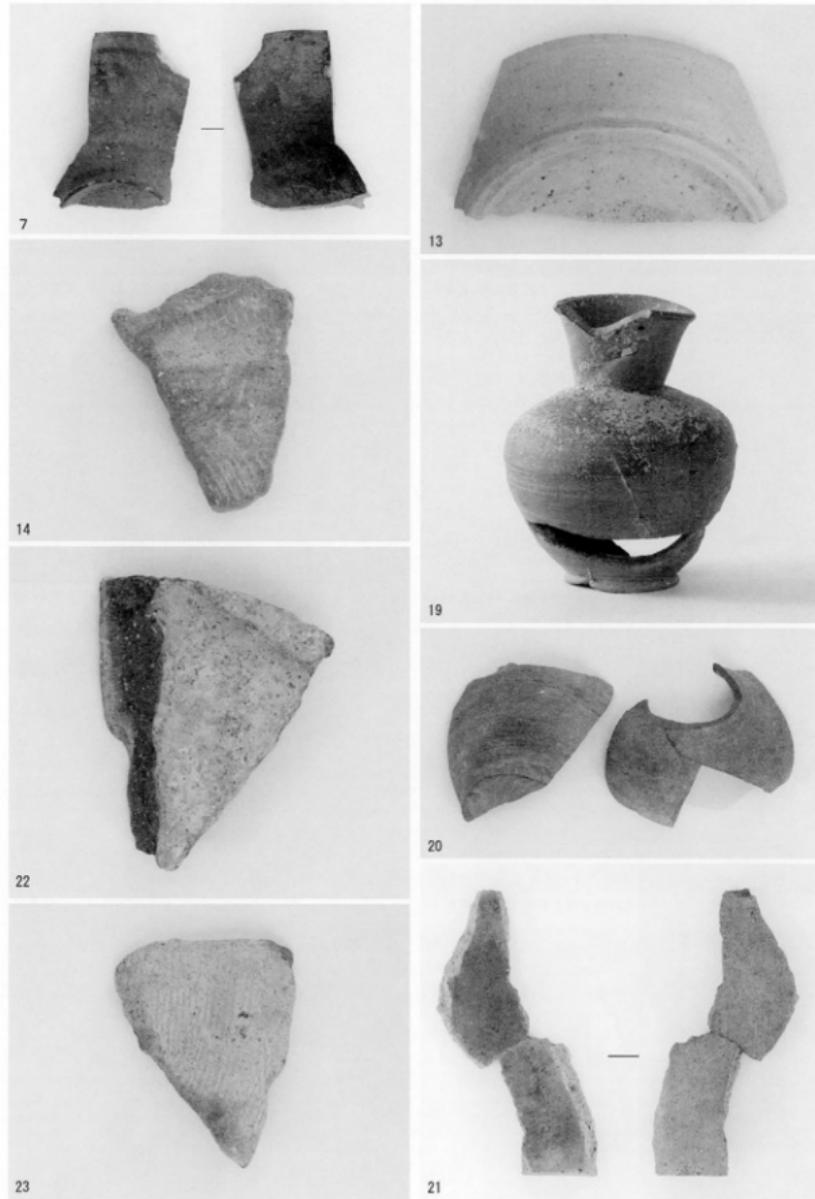
2区第1面(南から)



2区第2面(南から)

図版  
3







24



28



29



26



27



31



32





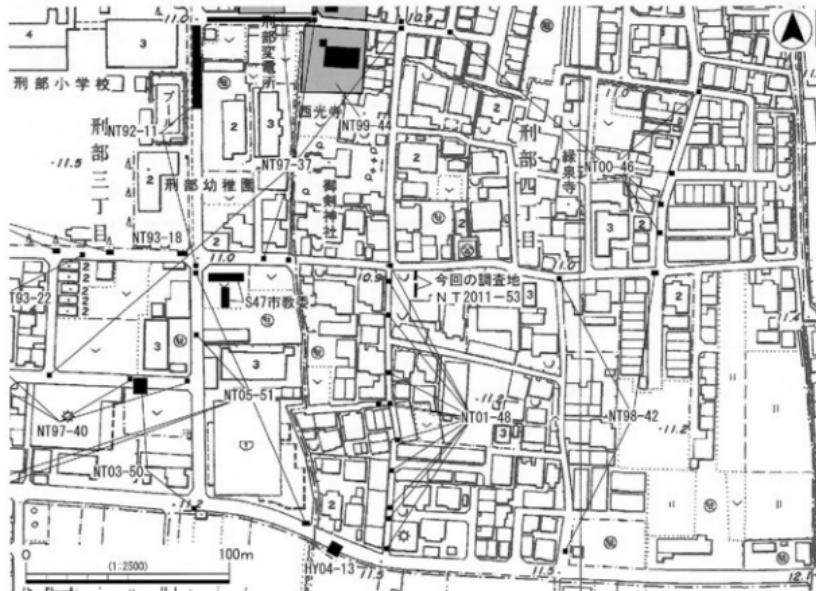


## V 中田遺跡第53次調査（N T2011-53）

### 1. はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。当遺跡は、昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。また同地形上に展開する東郷遺跡・小阪合遺跡等を包括して「東郷・中田遺跡群」と称されており、これらの遺跡は特に古墳時代初頭～前期において最盛期を迎えることが確認されている。

今回の調査地周辺では、北側道路上で第37次、東側道路上で第42次、西側道路上で第48次調査を、下水道工事に伴い実施している。第42次調査では古墳時代中期の古墳周溝と考えられる落ち込みを確認しており、多くの円筒・形象埴輪や、土師器・須恵器の集積を検出した。また第37次調査においても形象埴輪が出土している。第48次調査では弥生時代後期～古墳時代・中世の遺構・遺物を検出した。



第1図 調査位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、平成23年11月28日に実施した遺構確認調査〈中田遺跡(2011-378)〉の結果を受けて実施した分譲住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で行った第53次調査(N T 2011-53)である。

調査区は遺構確認調査区を挟んで南北に連なる2箇所(北・南区)で、北区が東西1.5m×南北3.0m、南区が東西1.5m×南北7.0mの長方形を成し、総面積約15m<sup>2</sup>を測る。なお南区北部が遺構確認調査区と重複していたため、北区を約1.5m南に拡張した。

掘削は、現地表(約T.P.+10.7~11.1m)下約0.8mまでを機械掘削し、以下の約0.3mを人力掘削により調査を行った。ただし北区では下層で遺構が見られたため、現地表下約2.0mまで調査を行った。

調査で使用した標高の基準は、調査地北東部に位置する八尾市街区多角補助点(1A255:T.P.+10.644m)である。

### 2) 基本層序

0層は盛土・搅乱。0層直下の1~3層は南区で見られた整地層で、近代のごみ穴と思われる。4層も近年の整地層であろう。下面が第1面である。5~8層は北区で見られた水成層で、平面的には捉えていないが東西方向の流路、あるいは落ち込みの埋土である可能性が高い。9層は南区南端で見られた整地層である。10層は綺麗な悪い層相で、作土と思われる。上面が第1面である。11~16層は南区で見られ、ブロック状を呈する層相で整地層の可能性が高い。17~19層はブロック状を呈し、南区の北半部では中世の遺物を大量に含んでいる。整地層の可能性が高く、上面が第2面である。20・21層はブロック状を呈し、作土と考えられる。中世の土器を少量含んでいる。22層は北区北部で見られた暗色を呈する汚れた土壤化層で、上面が第3面である。23層は水成層で、河川堆積と考えられる。

### 3) 検出遺構と出土遺物

#### 〈第1面(T.P.+10.7m)〉

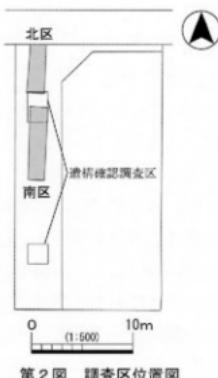
南区4層下面で溝1条(S D101)を検出した。また北区5~8層も遺構埋土の可能性がある。

#### S D101

東西方向の溝と考えられ、規模は幅約1.3m・深さ約1.0mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は4層からなる水成層である。水路等の機能が考えられる。近世陶磁器等が出土した。

#### 〈第2面(T.P.+10.2m)〉

南区17~20層上面でピット5基(S P201~205)、溝2条(S D201・202)を検出した。ピットは17~19層上面、溝は20層上面の構築である。また北区西壁においてもピット状の落ち込みが見られた。



第2図 調査区位置図











調査地全景(北から)



南区 機械掘削(南から)



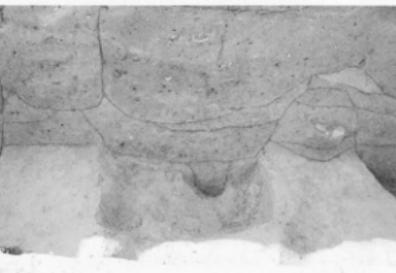
南区 全景(北から)



南区 SD 101(東から)



南区 SP 201・202西壁



南区 SP 202(東から)



南区 SP 204(北から)



南区 SP 205(西から)



北区 機械掘削(北西から)



北区 全景(北から)



北区 S O 301(東から)



北区 S O 301(南から)



北区 土器棺墓301検出(北から)



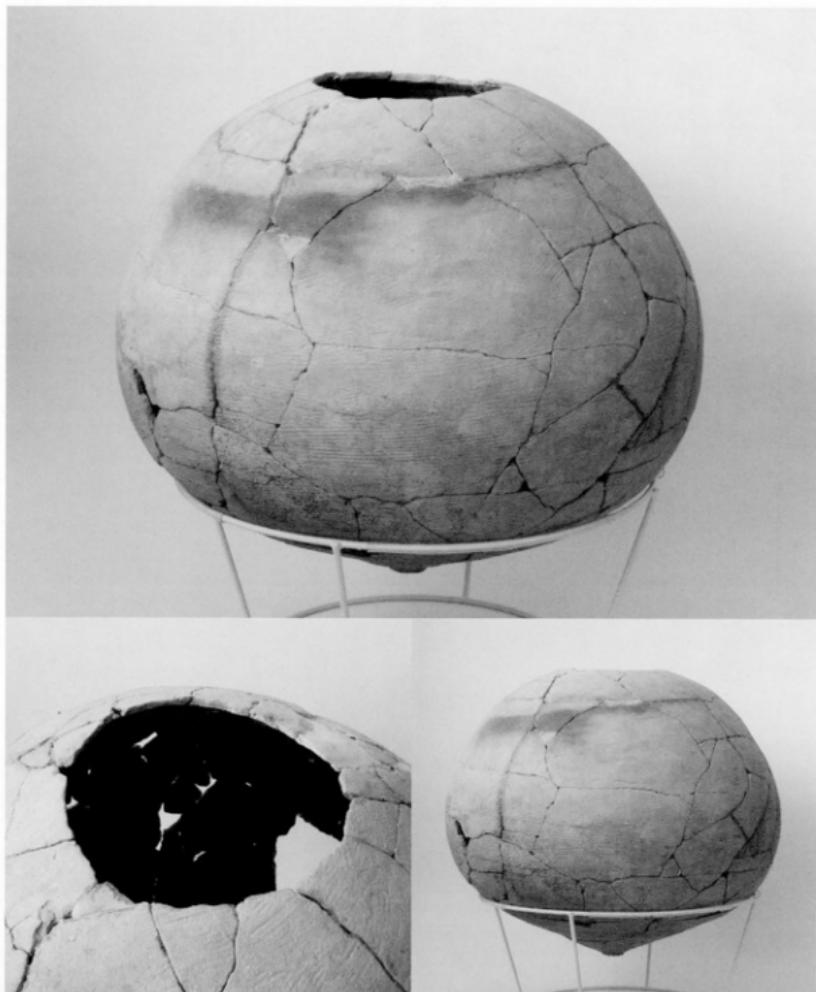
北区 土器棺墓301(北から)



北区 土器棺墓301(東から)



南区 調査状況(北西から)



土器棺墓301(17)



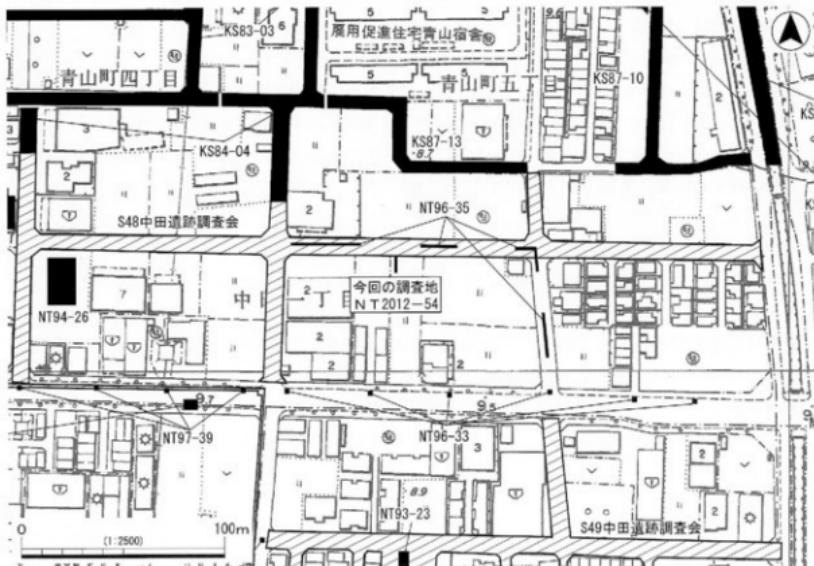


## VI 中田遺跡第54次調査（N T2012-54）

### 1. はじめに

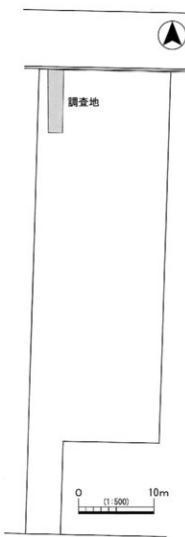
中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。当遺跡は、昭和45年(1970)の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。また同地形上に展開する東郷遺跡・小阪合遺跡等を包括して「東郷・中田遺跡群」と称されており、これらの遺跡は特に古墳時代初頭～前期において最盛期を迎えることが確認されている。

今回の調査地は中田遺跡北端にあたり、北側道路部分は区画整理事業に伴い中田遺跡調査会が調査を実施している他、下水道工事に伴い当調査研究会が第35次調査を実施している。また昭和56年(1981)に北西約40m地点で八尾市教育委員会が実施した調査では、古墳時代初頭(庄内式期新相)の土坑2基が検出され、他地域からの搬入土器を多く含む多量の土器が出土し、この資料については『中田1丁目39土坑出土土器』として、当該期の土器研究において標式資料と認識されている。

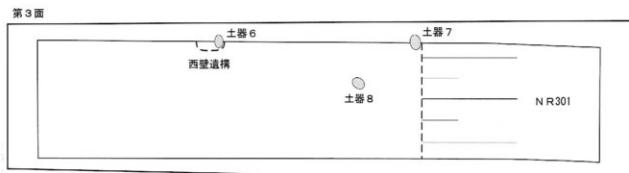
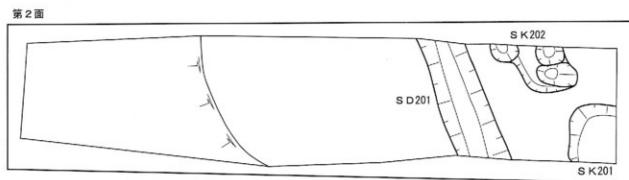
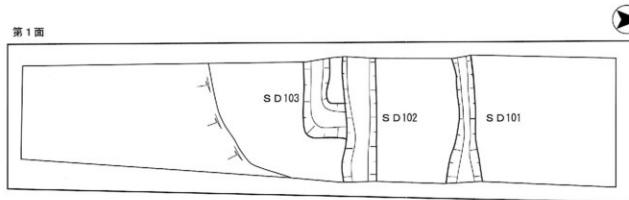


第1図 調査位置図





第2図 調査区位置図

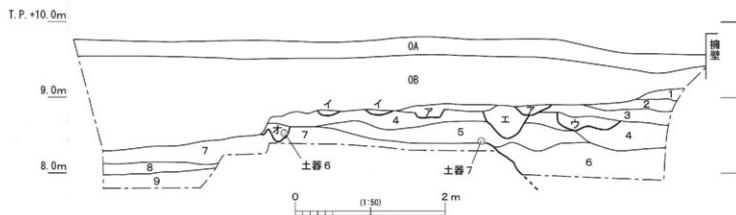


SK201東壁



SK201

カ. 10VR3/2黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト ブロック状  
キ. 2.5Y5/1灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト ブロック状  
ク. 10YR5/1褐色細粒砂～粗粒砂混シルト ブロック状



第3図 平断面図

## OA. 現作土

OB. 盛土・擾乱

1. 2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト 作土
2. 10YR6/3/1灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 固く締まる
3. 10YR3/1褐色細粒砂～粗粒砂多泥シルト質粘土 固く締まる土壌化層
4. 10YR5/2/2灰褐色細粒砂～粗粒砂多泥シルト質粘土 固く締まる土壌化層
5. 10YR5/3/2灰褐色細粒砂～粗粒砂ブロック質粘土質シルト 土壌化層
6. 10YR6/3/1灰黄色シルト質土～粗粒砂互層 水成層
7. 2.5Y6/3/1灰黄色シルト質土 水成層
8. 2.5Y5/1オリーブ灰色粘土質シルト 水成層
9. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 水成層

## SD101・102

ア. 2.5Y6/1灰黄色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土 ブロック状

## SD103

イ. 10YR5/1褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 ブロック状

## SK202

ウ. 10YR4/2灰褐色シルト質粘土ブロック混細粒砂～極粗粒砂

## SD201

エ. 10YR4/1褐色細粒砂～粗粒砂多泥粘土質シルト ブロック状

## 西壁遺構

オ. 10YR4/1褐色シルト～粗粒砂ブロック混粘土 ブロック状







調査地(北から)



機械掘削(北から)



第1面(北から)



第1面(東から)



第2面(北から)



第2面(東から)



SK 201(西から)



SK 202(東から)



S D 201検出(東から)



S D 201(北東から)



N R 301西壁



西壁遺構(土器 6)



土器 7(東から)



土器 8(南東から)



西壁



調査状況(北西から)



7 肩部







